詩誌 立彩

Rissai: A Journal of Poems

第 18 号
2020 年 9 月

目次

関根　全宏　風が吹いている――山尾三省にならって　2
追憶　4
眺む　6
相澤　ゆかり　握りつぶす　8
伊東　友乃　ゆがむ　10
男は歩きながら考えた　14
田中　はじめ　大石静之助のために――与謝野鉄幹にならって　18
清涼飲料水　20
東野　潤　すべてが家族写真のように　24
老いたる者へ　26
またひとつの死がおのれをうたう　28
渡辺　信二　あの頃も暑かった　30

表紙原画

鈴木　順三　「そうしなければいられないこと　2」（表紙）
「そうしなければいられないこと　1」（裏表紙）

風が吹いている

——山尾三省にならって

関根　全宏

風はどこにでも
吹いているが
深い真実に吹くことは
あまりない

私たちはほんとうは
ひとつだった
水のごとく　風として

流れ　流れ去り
流れ来る　億の
命の　ひとつだった

その風が
私になり
あなたになる

ならば　あなたは
流れ去り　また
流れ来るのか

風が吹いている
この墓の深い底には
真実の水が流れている

追憶

関根　全宏

姿を消した彼女から　届いた手紙がある
言葉も写真も色褪せていた　だけどそれは
今にも滲み出ているものだった
今に滲み出ている　影とか闇とかが

きらきらと輝くように　揺れていた
どうしようもなく懐かしい　と僕は思った
自分のものでもないのに　自分は知らないのに
そこに綴られている言葉には　重みと救いがあった

言葉にならない感情の淀みと　切実さもあった
そして思った　誰かと　世界と　繋がろうと
していたのではない　そうではなく　必死に

自分と繋がろうと　していたのだと

そうやって　結果的に　不器用なりに
今に向かって
前に進んで
躓いていた

それを届けようと思った彼女の意志を
僕は　美しいと思った
誰かの意志を　美しいと思う
そのために人は生きているのだ

眺む

関根　全宏

無関心な空を見上げ
答えをさがしている
哀しみの答えと
死んだ者の答えと
生きている者の答えと
答えなどないと
分かっているのに
そこにはただ
うっすらと欠けた月が
浮かんでいるだけなのに

握りつぶす

相澤　ゆかり

たまには　晴れ晴れとして
運命の祝福を感じたい
たまには　全てを忘れて
人生の転変を楽しみたい

ほら　たとえば　少年たちが歩道を笑って行く
子供たちが公園でさんざめく
老婆たちが緑の樹陰で微笑む

そうした　明日には忘れる光景の
いかに懐かしく　愛おしくあることか
そのためには　傷心や労苦など　何でもなかった――

今は　終わらない物語のような道行きと
抱え込んだ痛み　途切れないつまづき
そこで　わたしたちの夢は　握りつぶされる
しわしわの千円札のように

ゆがむ

伊東 友乃

愛情を掴みそこねた　と思って
男は唾を吐いた
世界にケチをつけるかのように
ゆき場のない　思いを
するどい唾にして

３６年間　一緒に住んでいた女がいるが

ほぼ　ほぼ　憎しみにちかい感情があった
しかし　家族というかたちのあり方を
男なりに解釈すると
そんな感情も　解釈できてしまい

結果
妙な病気になった

男の場合は
なぜか眼の病気で

電信柱や　建物がゆがんで見えた

それでも　女に黙って男は運転しつづけ
女のいる家から逃れるように
毎日　ひろびろとした大地が見渡せる道を運転しつづけた

女の顔を見ていると不思議だった

男にひとかけらも愛情のないような顔をして
でも妙に
つるんと発光していて　男の問い全てを吸収してしまいそうな奥行きがあった

なぜ一緒に住んでいるのか

金のことを考えるとしょうがない気がするし
運命といわれればそうかもしれないし

何より　３６年間の正当性を守らなきゃいけない
そんな恐れが

男を支配して

ゆがんでいく世界の中で
掴みそこねた　愛情が
とても欲しかった愛情が
それはそもそも最初　どこにあったのか
そしてどのタイミングにあったのか

見出すことが困難なまま
そして
見出すつもりもないまま

男は
恐れしらずのように
また
するどい唾を吐いた

男は歩きながら考えた

伊東　友乃

これから
神妙な面持ちで
儚さを語るまえに
ふと　いったい何を喋るつもりなんだ？
とでも　気づかせてくれる何かがあるといい

道にたっているポストのような硬いやつかもしれないし
そこらに落ちてる木漏れ日のように消えていくやつかもしれない

あまりにも　儚さを語るには
ここにもっている命が儚くて

その比較を思うと

儚さを語るまえに　そのまえに

宇宙について語りたい
そのほうがいい
ずっと
そのほうがいい気がする

アポロが月に着いたとき

一匹の犬が　芝生のうえでおしっこをした
車椅子の老夫婦がそれを黙って見て
また　お互い向き合った

隣の家では
子どもが隠していたクッキーを食べて
誰にも見つからないまま
缶を棚に戻した

子どもは　とても嬉しそうな顔をして
ひとつの冒険が終わったあとみたいだった

その隣は
空き地で

その隣の隣のアパートでは
ひとりの女が
ずっと歯痛と
恋人から届かない手紙について悩んでいた

宇宙について語ろうとしても

地球上には儚い話が転がりつづけて

そう思うと　安心して

きっと自分が語りたい
儚さも
いつかの誰かと同じなんだという

なんだ　儚さは儚くなくて

どうせ宇宙については語れないんだし

儚さや　宇宙について
語るまえに
生きようと　そうだ
このまま　歩いて　歩きつづけて

生きよう　そうしよう
語るより　それがいい　そうしよう

大石静之助のために

——与謝野鉄幹にならって

田中　はじめ

大石静之助は　死んでいません
大石静之助は　いい気味に死んでいません
機械に挟まれて　死んではいません

人の名前に　誠之助は　沢山いました
だけど　だけど
おれたちの友達　誠之助は唯一人です

おれたちは　誠之助にいまでも逢っています
だから　おまえは　死んでいません
いや　死んだって構うものですか

機械に挟まれて死んだって
いい気味に死んだって
馬鹿な大馬鹿な　おれの知らない
だけど　おれの友だち　誠之助

いわゆる日本人で無かった誠之助
立派な気狂いだった誠之助
大逆無道の誠之助　ほんとにまあ　本当の日本人

皆さん　大逆無辜のお医者さん
ドクトル大石　コックの大石
おれの友だち　いい気味な死に方なんぞ　させません

誠之助と誠之助の一味も　死にません
善良で従順な日本人は
これから　気楽に寝られません　おめでとう

清涼飲料水

田中　はじめ

わたしたち　いつもの習慣から
居心地よい愚かさを
文化と勘違いし
清らかな地べたを
涼しげに這い回る

たとえば　暑さを避けて
炭酸水の王冠を抱き
空元気を鵜呑みにしてみる
時に　コークは嫌いだ　あれは
コロラドの水なのかと尋ねる

あるいは　彼岸が過ぎても　暑さを嫌い
サイダー瓶の口金にさえ

触るのを恐れる
時おり　それは　セブンイレブンの
売り物なのかいと呟く

なんなのだろう　わたしたち
どうにかしようとして
いつも　どうかしていた

無盲目な無抵抗が
無闇に　ジュースやウーロン茶
ミネラルウォーターを欲しがり
ときにはまた　放り投げて
水を求めて　近場に走り出す

街角のいたるところに
自動販売機が林立し始めたのは
これを見越していたのか

それは　誰かの策略なのか

今はもう　野菜ジュースも清らかに
缶コーヒーも百円で
モモンガーも美味しく飲み干す

環境省選定　水百選
利尻富士　広瀬川
八ヶ岳　白州　忍野八海　長良川

原料の水そのものが
安くて美味しいニッポン
頂く命も安くて豊富で立派なニッポン

三井寺　桜井戸　四万十川
不老水　清水
垣花樋川

茶碗のかけらで　ニッポン
乾杯　ニッポン　全テヲ水ニ流スノダ
やはり　文化だ　わたしたち

文化的な
あまりに文化的な

流すべき
水の
あまりに清く涼やかさな様

すべてが家族写真のように

東野　潤

冬がもたらす厳しさ　静けさを
人びとは　恐れ　また　憧れた
まだ　テレビや冬スポーツのなかつた頃
とても落ち着き　穏やかだった

人びとは　冬　わが家に歸るため
勇氣が少し必要だったが
家での暖炉が　慰めた

炎は　力づよく活氣があって
ほんとうの命だった
そして　周りには　家族がいる

指がかじかんで帰っても
息が白くても　冬なら　人は助け合う
思い出を擦り合わせ　暖め合う
こうして　室内は　すべてが家族写真のようだった

老いたる者へ

東野　潤

見つめ合うことも無く
語りあうことも無い
行きずりの老人よ

街路灯の下
おまえが杖をつき　ずるずると前屈みに歩く
今は　午後１１時２２分

遠くのイルミも見えない
車の警笛も聞こえない
連れ合いもいない　行きずりの老人よ

どうか　そんなにも

舗道をひきずるな
そんなにも　前にからだを屈めて　杖にすがるな

はたはたとズボンの裾を揺らし
破れたメリヤスを
風が　寂しくしてゆく

ええ　わたしたちもいつか
この時間　この場所で
スリッパをズリながら　前屈みに杖をつくでしょう

行きずりの老人の顔は
わたしたちによく似ている

またひとつの死がおのれをうたう

東野　潤

若い頃　世界は　我がものに見えた
意志がわたしをうたった
漲る若さが　世界へ導いた
全てが実現する確信

あれは　いつだったろう
ある医師が　ある時　わたしの身体に
わたしの意思とは異なるものを
読み解いた

大切なものは　失って初めて気づく
わたしは　この場しょが　もはや
わたしの場しょではないのだと悟る

すぐに暗闇と冷気が支配し
墓石も　わたしを歌わない
全てが中断する予感

あの頃も暑かった

渡辺　信二

烏が啼き　地球が東に傾く時
全ての空が夕焼けになり
またひとつ　地球が傾くと
全ての窓ガラスが　西日を茜色に反射する

もう帰る時間だ

遊び疲れた公園から
バットにグローブを通し　肩に担いで
弟と一緒に　路地裏を通る
ぷーんとみそ汁の匂いがして
お腹がぐーっと鳴る

家に入る前に　土間で
汗と泥の混じった手足を
井戸水に流す

突然　こうやってね　素麺は
流し水でぬめりをしっかり落として
一口分に結ぶんだよ
そう教えてくれた人を思い出す

今日の夕飯は何だろう
「お母さん　ただいま！」

毎日まいにち　その日の夕飯に心を砕き
外食など考えることも無かった時代

食卓のうえで
裸電球のスイッチが捻られる

人参やこんにゃくのお煮染め
ささやかな豆腐とほうれん草で
じゅうぶんに満たされていた

2020,03,01 から 2020,09,15 までに贈られた詩誌ほか

詩誌
『りんごの木』55。
『万河・Banga』23。
『GATE』30。
『白亜紀』157。
『コールサック』102,103。

詩書・書籍ほか
本江邦夫『多摩美術大学と私 1998-2019』多摩美術大学、2019。
福田保坂俊司編著『アジア的融和共生思想の可能性』中央大学出版、2019。
新倉俊一編『私の好きなエミリ・ディキンスンの詩２』金星堂、2020。
矢口以文「詩二十一篇」北星学園大学文学部『北星論集』57,2、2020。
福田恒昭『よるのくに』思潮社、2020。

詩誌『立彩』第 17 号　2020 年 9 月 20 日発行
頒価 300 円
編集発行　「立彩」
〒400-8555　山梨県甲府市横根町 888
山梨英和大学人間文化学部　渡辺信二研究室気付
印刷　東洋出版印刷株式会社　TEL 03-3813-7311